プロバスケットボールBリーグが取り組む地域活性化に関する調査２
―群馬クレインサンダーズの調査―

Research About Regional Activation by the Professional Basketball B League 2
―With Reference to GUNMA　CRANE　THUNDERS―

伊　藤　優　子

１．はじめに

2023年夏にFIBA（国際バスケットボール連盟）が主催するバスケットボールのワールドカップが日本では沖縄県の沖縄アリーナ、インドネシア、フィリピンの３か所で同時に開催された。日本は死の組と言われたグループEに入ることになった。残りの３チームは、ワールドカップ前の世界ランキング３位のオーストラリア、世界ランキング11位のドイツ、世界ランキング24位のフィンランドが名を連ね、世界ランキング36位の日本にとっては勝ち上がることがまるで夢のように感じられる組に加わることになった。しかも日本は一時期、エンターテイメント性を追求するプロリーグbjリーグと実業団リーグの２つが存在したことで、不均衡な状況にFIBAからは国際大会自体に参加させてもらえない状況が数年続いた。Jリーグ初代チェアマンの川渕三郎氏が中心となってバスケットボール界も２つのリーグを解体し、Bリーグを立ち上げることができた。そういった経緯を経て、ようやく東京オリンピック2020に参加できたが、参加国枠があったための出場だった。結局、2021年に延期開催されたオリンピックでは１勝もできずに予選リーグ敗退となった。2023年のワールドカップは2024年のパリオリンピックの出場がかかるとはいえ、オリンピックに出場というのは厳しい状況だった。下馬評でも決して高くない評価だったが、格上のフィンランド相手に予選リーグで１勝し、決勝進出とはならなかったものの、その後も２試合勝つことで、アジアでの１位を確定させ、パリオリンピック出場を決めることができたことは記憶に新しい。体格差があり、競技者人口が多いバスケットボールにおいては国際大会で結果を出すことは難しい。そんな厳しい中でパリオリンピック出場という結果が出たことは、喜ばしいことだった。Bリーグ発足から８シーズン目になり、地域スポーツとしてバスケットボールが根付き始め、Bリーグで世界トップクラスのチームの代表が活躍する時代になった。Bリーグはバスケットボール普及および国際大会での選手育成を掲げている。さらに地域に根付くためにバスケットボールを通じた地域活性化はＢリーグの目指すところだ。前回、茨城ロボッツの取り組みについて調査をもとに基礎的資料を作成したが、引き続き地域の取り組みについて調査を行い、基礎となる資料をまとめたい。

2．Bリーグの使命

Bリーグには３つの使命があり、以下のとおりである。

B.LEAGUEはバスケットボール界をより発展させ、より良い未来を築くために以下の３つを果たすことをお約束します。

（１）世界に通用する選手やチームの輩出

日々、切磋琢磨する土俵を作り世界に通用する選手やチームを輩出することです。それがB.LEAGUEの使命であり、日本のバスケットボール競技力の底上げ・競技人口の裾野の拡大を図ります。

（２）エンターテイメント性の追求

B.LEAGUEでは徹底的にエンターテイメント性を追求して参ります。

勝っても負けても試合を見に行って楽しかった。「今日のあのプレーは良かったね」「今日のあの演出は良かったね」と言っていただけるようなエンターテイメント性を重視した演出に取り組んで、参ります。

（３）夢のアリーナの実現

体育館ではありません。「アリーナ」です。

夢のアリーナを作り、地域に根差したスポーツクラブになっていく。非日常の空間を存分に楽しめる…試合を楽しむだけではなく、スポーツを通して人生を楽しむことができるような環境を提供し、B.LEAGUEを盛り上げて参ります。[1]

3．B.LEAGUE　Hope

Bリーグではスポーツのパワーは社会・地域からの期待を背負っており、それに応えるべく、社会的イノベーションの実現を目指している。社会的責任活動を「B.LEAGUE Hope（B.Hope)」として、推進していく活動を行っている。スポーツは社会・地域においてコミュニケーションや交流を行うことで繁栄してきたバックグラウンドがあり、社会的問題には無関心ではいられない状況だ。平和で発展的な世の中に進展してきた一方、貧困の格差が広がり、人種、性別、宗教、価値観などさまざまなことが多様化してきている。自由に思えて、実は不自由な社会的問題や課題に直面している現在、持続可能な発展が求められている。こういった社会的な課題をスポーツクラブ、選手、ファン、地域、パートナー企業、自治体など各方面の人々を巻き込んでSDG’ｓの実現を目指した行動を起こしていくことを活動領域としている。

SDG’ｓとは、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）であり、外務省国際協力局の資料では、「2015年９月の国連サミットで全会一致で採択。「誰一人取り残さない」持続可能

[1] B.LEAGUE　ホームページより「B.LEAGUEとは」

で多様性と包括性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標。」としている。

Bリーグが示す、３つの活動領域は、「PEOPLE/PEACE/PLANET」で、2017年から立ち上げている。その先駆けとして、2017年に行われたALL-STAR GAME2017 において、「難病を抱えた子どもとそのご家族のご招待プロジェクト」を実施した。

今回は2023年に群馬クレインサンダーズの活動についての調査のまとめである。

４．群馬県の概要

（１）群馬県の基本情報

群馬クレインサンダーズの活動報告の前に、群馬県の概要を整理する。

群馬県は関東地方の北西部に位置し、海洋国家の日本としては数少ない内陸部に位置する海なし県としても知られている。地図で見ると鶴の形をしているため、群馬クレインサンダーズのクレインもこの鶴からつけられたチーム名になっている。北には新潟県、南には埼玉県、東は栃木県、西は長野県に囲まれおり、もともとは農業や養蚕業、畜産業を主産業としており、今でも農産物ではレタス、ネギ等を多く生産している。温泉は質が高く、旅行業界に携わる人からの投票で選ばれる第36回日本の温泉100選に20年連続１位に選ばれた草津温泉、石段の風情が情緒ある伊香保温泉、白濁した湯が人気の万座温泉、宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」のモデルになったのではないかと言われている四万温泉など名だたる温泉が多く存在し、温泉県として人気がある。人口は2023年10月のデータでは1,900,840人で他の都道府県と同様に人口が減少している。県庁所在地の前橋市は2023年10月時点で326,904人である。経済圏である高崎市は前橋よりも人口が多く368,945人である。交通の要所で多くの企業も北関東の拠点として支店を構え、文化芸術の街としても存在感を放っている。

（２）群馬県のスポーツ事情

高校では、サッカー、野球、バスケットボールなど人気のスポーツで強豪校があり、優勝することも数多くあり、注目される。一方で、プロスポーツはそれほど目立つものはなかった。サッカーではJリーグ２部に位置するザスパクサツ群馬があるが、草津は群馬県でも奥にあり、立地の面で集客するにはマイナス部分がある。野球は独立リーグのルートインBCリーグに所属する群馬ダイヤモンドペガサスがある。そしてBリーグの群馬クレインサンダーズが加わっている。次に群馬県のプロスポーツ事情を記述する。

４．群馬県のプロスポーツ

（１）ザスパクサツ群馬

ザスパクサツの歴史を紐解くと、1995年に群馬県サッカーリーグ４部で優勝したことから始まる。

翌年には群馬県社会人サッカーリーグ３部優勝、さらに翌年に群馬県社会人サッカーリーグ２部優勝と快進撃を続けるが、1998年には群馬県社会人リーグ１部で７位となり、２部に降格が決定する。その後、選手が減少するなど、紆余曲折を経て、草津町が支援を決める。2003年には株式会社草津温泉フットボールクラブが設立される。2004年にJリーグ２部昇格の承認を受ける。その後、Jリーグでは２部と３部を昇格降格を繰り返し、安定しない成績を残しているが、現在では２部の所属である。2023年の明治安田生命J２リーグでは22チーム中11位という成績だった。2020年に会社名をザスパと改名し、チーム名もザスパ草津からザスパクサツ群馬となった。群馬県は前橋育英高校が高校サッカーでは全国優勝するなど輝かしい成績を残している。名将と言われている監督山田耕介氏を慕って、全国からサッカー選手が集まってくる。実際、全国高校サッカー選手権大会24回出場し、優勝１回、準優勝２回など、結果を残している。さらにプロサッカー選手は100名以上、日本代表にも山口素弘氏や松本山雅所属時の練習中に急逝した松田直樹氏など複数名が活躍した。そういった基盤があるため、サッカー熱はあるのだが、草津町に本拠地だった時には立地の悪さから敬遠されたことも否めない。しかし、現在は県庁所在地の前橋市に本拠地を移し、サッカーファンを増やすべく努力をしている。

（２）群馬ダイヤモンドペガサス

群馬ダイヤモンドペガサスは野球の独立リーグに所属するプロチームである。日本のプロ野球は閉鎖的で全国で12チームしかなく、新規参入が難しい。そんな中、2004年にパリーグ所属のオリックスブルーウェーブと大阪近鉄バッファローズが合併を前提にプロ野球の再編問題が勃発した。この再編問題の影響を受け、プロ野球の独立したプロリーグが誕生した。独立リーグはNPB（日本野球機構）所属のプロ野球チームを目指す選手の受け皿として選手育成を行い、さらに地域密着を旗印に活動している。現在は2005年設立された四国アイランドリーグplusをはじめとして８のリーグが存在する。群馬ダイヤモンドペガサスはベースボール・チャレンジ・リーグに所属している。ベースボール・チャレンジ・リーグは命名権に基づく通称はルートインＢＣリーグであり、関東５県と甲信越地方２県、東北地方１県の合計８県からなる。2008年から加盟し、球団名は群馬県の「馬」の字から天馬であるペガサスに由来する。ダイヤモンドの名は野球のベースをダイヤモンドと見立てたところから命名している。野球の普及活動、地域振興イベントやボランティア活動への積極的な参加、ボールパーク計画、地元マスコミとの良好なコミュニケーション、地域講演会を基盤とするサポーター組織の確立、キャリアサポート制度による生活基盤の確立などを運営方針に掲げている。

５．群馬クレインサンダーズの概要

群馬クレインサンダーズは現在、群馬県太田市にアリーナを構えるＢリーグ１部所属のプロバスケットボールチームである。運営会社は株式会社群馬プロバスケットボールコミッションで、2019

年から不動産・住宅販売会社のオープンハウスが筆頭株主になり、太田市出身の荒井正昭氏が会長となる。クレインサンダーズの名前のクレインは群馬県の象徴ともいえる「鶴」である。これは群馬県の地図を見てもらえばわかるが、群馬県の形は鶴が舞う形をしており、鶴は日本の象徴でもあり、優雅な美しさと器用さを連想させるものである。サンダーズのサンダーは「雷」であり、群馬県は雷の発生率が高い地域のため、エネルギッシュ、スピード感、パワーなどを連想させるサンダーズを採用し、この二つをまとめてクレインサンダーズと命名された。チーム理念は、「バスケで群馬を熱くする」を掲げ、スポーツであるバスケットボールを通じて群馬を盛り上げていこうという意気込みで活動している。公式マスコットキャラクターは鶴をモチーフにした「サンダくん」だ。

（１）沿革とホームアリーナ移転

2011年に群馬クレインサンダーズが創立された。2012－13 シーズンからbjリーグに参戦した。設立当初からホームアリーナは県庁所在地である前橋市にあるヤマト市民体育館前橋だった。茨城ロボッツでの調査資料にも記述したが、バスケットボール界は、一時期、企業の運動部といった形態の実業団リーグであるＮＢＬとエンターテイメント性を打ち出したプロのbjリーグの２つが存在した。bjリーグは企業の後ろ盾のない市民クラブといえばわかりやすいだろう。2016年秋からＢリーグが発足し、本格的にプロバスケットボールリーグが動き出した。群馬クレインサンダーズは１部参入を目指したが、２部所属からのスタートとなった。順調に力をつけて、2019－20シーズンには１部昇格を決めるプレイオフ進出を果たすことになったが、新型コロナウィルスの感染拡大により、Ｂリーグはポストシーズンの中止が決定された。ポストシーズンでの勝利数で信州ブレイブウォーリアーズと広島ドラゴンフライズの１部昇格が決まり、惜しくもこのシーズンは昇格ができなかった。このシーズンにオープンハウスが筆頭株主になり、Ｂ１ライセンス取得のための施設基準についてはヤマト市民体育館前橋を改修することでクリアすることができた。オープンハウスが筆頭株主になったことで、財務状況が改善の見通しが良くなり、ホームタウンを会長である荒井氏の地元である太田市に移転し、ホームアリーナを建設することが決定された。2026年に新しい構想を掲げるＢリーグ１部の条件として、アリーナが収容人員5000人以上という基準を満たすことが不可欠だという判断だった。そもそもヤマト市民体育館前橋は鉄道駅がなく、来場に不便なうえに、車社会の群馬県において駐車場が400台程度しかないという立地・アクセス条件の悪さも課題だった。体育館を改修するにも音響、映像環境整備やＶＩＰルームを設置するなど問題が山積みだったため、ホームそのものを移転するという決断をすることになった。太田市は富士重工など大企業があり、経済的には豊かであるが、スポーツチームやエンターテイメントがなく、地域資源を必要としていた背景がある。地元が誇れるスポーツチーム、だれでも楽しめるエンターテイメント、こういった資源を欲していた太田市とオープンハウス会長の荒井氏が太田市出身ということで、思惑が一致した点もあり、太田市への移転が順調に決まったのだ。アリーナ建設の発表からあっという間にアリーナ完成を迎え、2023年４月の2022－23シーズン後半にオープンすることができた。アリーナ名は「ＯＰＥＮ　ＨＯＵＳＥ　ＡＲＥＮＡ　ＯＴＡ」で、財源は企業版ふるさと納税と言われる地方創

生応援税制であった。地方創生応援税制とは地方公共団体が行う地方創生の取組に対する企業の寄付について、法人関係税の税額を控除するものである。これをオープンハウスが活用し、企業版ふるさと納税として寄付したものでアリーナを建造した。その結果、アリーナにオープンハウスの名前も太田の名前も併記されている。

（２）群馬クレインサンダーズでのヒヤリング調査

Ｂリーグは地域に根付いたチーム作りを行い、地域に貢献していくための活動を行っている。群馬クレインサンダーズも同様の活動を行っている。今回は試合前に記者会見室で調整できず、短い時間ではあったが、群馬クレインサンダーズ地域創生グループの牧山氏にヒヤリング調査を行った。ヒヤリング内容は以下のとおりである。

・ホームタウンの決断について

現会長の荒井氏が群馬県太田市出身だったことや太田市に娯楽がないため、太田市側が熱心に誘致を行ったことも決断する理由になっている。新Ｂ１に移行する前に早く地域住民に認知され、愛されるチームになるためには早く決断することは不可欠だった。

・新アリーナ構想について

太田市の所有になるので、群馬クレインサンダーズのホームゲームはもちろんであるが、バスケットボールというスポーツに限らず、地域の皆さんにできるだけ活用してほしいと考えている。例えば、高校生のスポーツ大会や音楽のコンサートなど幅広く利用されれば、地域に根付いた交流拠点になるだろう。

・太田市との協力関係について

太田市長も毎試合、非常に熱心に応援しており、ホームでは毎試合、観戦に来ている。クレインサンダーズのチームの活動には大変協力的で良好な関係を築いている。今後も長く、太田市に根付いた活動をして、愛されるチーム作りを目指していく。

・クレインサンダーズの人気・熱量について

移転当初はあまり盛り上がっていなかった。チームとして長く活動しているので、長年のコアなファンがいるが、その人数は増えず、頭打ちだった。しかし、レベルの高い選手を獲得し、勝てるチーム作り目指し強化した結果、チームも強くなり、アリーナ完成を間近に迎え、徐々に人気が上昇してきた。ザスバクサツ群馬との連携も積極的に行い、群馬県全体で盛り上がるよう努力している。

・社会貢献活動について

社会活動については社内では２名で担当している。企業、行政、地域の人々などともに推進を図り、ＳＤＧ’ｓの取組を行っている。各所から声掛けをしてもらえる機会も増え、Ｂリーグが目指している社会問題にも適応した活動を行っている。特にＳＤＧ’sの取組として、CO^2削減を目指し、排出量を測定していく準備を進めている。

６．クレインサンダーズ恩返し（社会貢献活動）

群馬クレインサンダーズはかけがえのないパートナーである、ファン、太田市、パートナー企業、地域社会などに支えられている。今の世の中は社会課題の解決が不可欠になり、ＳＤＧ’ｓの活動が求められている。オフコート３Ｐをコンセプトにファンや地域への感謝の気持ちとして社会的責任を果たし活動をリードしていくとしている。以下、オフコート３Ｐについてクレインサンダーズのホームページより引用する。

オフコート３Ｐとは「Planet１（地球を守る）」「Ｐｅｏｐｌｅ（支援が必要な人に手を差し伸べる」「Ｐｅａｃｅ（平和・安心安全）」の３つの基軸に、コミュニティの抱える課題やニーズに応える形で実施し、世界最大級の選手数を誇るスポーツを事業とするプロチームとして、世界が一丸となって社会問題に挑むＳＤＧ’ｓ（持続可能な開発目標）に貢献します。[2]

ＳＤＧ’ｓの活動

（１）Planet

クレインサンダーズは気候変動問題、地球環境について深刻にとらえている。気候変動に大きく影響するＣＯ^{2}削減に積極的に貢献していくとしている。国連が示す「スポーツ気候行動枠組み」新基準に2022年署名し、2030年までにＣＯ^{2}排出量半減、2040年までにＣＯ^{2}排出量正味ゼロにコミットした。そこで、試合会場でのエコステーション運営を行い、ゴミの分別、CO^{2}排出の測定を行い、試合会場での廃棄物の削減を目指している。

（２）People

クレインサンダーズ・コミュニティにおいて、弱い立場、苦しい状況にある人々に支援し、人権、ダイバーシティに関する人の環境改善に取り組む。また社会的、経済的に恵まれない子どもたちを中心に苦しい状況にある多くの人々を健やかな生活を送れるようにサポートするとしている。その支援にはホームゲームでレモネードを販売することで売上金額を小児がん支援のために寄付する「レモネードスタンドプロジェクト」活動や女性活動支援の国際女性デーをきっかけに「ＯＮＧＡＥＳＨＩ　ＷＯＭＥＮ」として群馬県で活躍する女性の活動をサポートするプロジェクトを行っている。ほかにもやむなく廃棄されてしまう食品を集めて必要な人に配布するフードドライブ活動や児童虐待防止のオレンジリボン活動、乳がん予防のピンクリボン活動などを行っている。

[2] 群馬クレインサンダーズホームページ「CRAINE THUNDERS ONGAESHI」

（３）Peace

群馬県交通安全大使として役割を果たすべく、交通安全運動の啓発活動などを行い、地域の安全を呼びかけている。時には１日警察署長など担当し、自転車利用者のヘルメット着用や夜に車のライトが反射する際にドライバーの視認性が高まるリストバンド型反射材の利用を促し、試合後に事故にあわないよう啓発している。　地域の安全を守るために警察や消防などからも依頼も多いということだった。選手が協力することで地域住民の注目度もあがり、チームとしての地域に貢献している。

７．おわりに

群馬県は文化、芸術だけでなくスポーツも盛んで、プロスポーツもバスケットボールが加わったが、サッカー、野球、加えてプロではないが女子ソフトボールチームであるビックカメラ高崎などもあるうえ高校スポーツも注目されることも多い。スポーツの力は地域を盛り上げる活力になり、地元を誇れる要素でもある。クレインサンダーズのように太田市が市長自ら、力を入れて協力体制を敷いているところも強みになる。そこにパートナーとなる地元企業も大規模企業だけでなく、小規模のところも賛同を得るようになっている。例えば、歯科医院などもスポンサーになり、２日間はその試合の冠スポンサーとなるなど地域が一体となってサポートしている様子がみられるようになった。Ｂリーグは８シーズン目だが、２シーズン目からＢリーグを見てきている著者は各チームの地域への貢献している取り組みが年々、強く感じられるようになった。オープンハウスという業績がいい企業が後ろ盾になっていることもクレインサンダーズの強みである。不動産・住宅会社だけにあっという間にアリーナを完成させ、そのアリーナは世界最高峰のＮＢＡにも劣らないほどの素晴らしいものになっている。４面スクリーン、映像や音響、ＶＩＰルームなどすべてにおいて驚く施設になった。2024年以降も各チームが次々とアリーナを完成させる。沖縄アリーナを筆頭として、アダストリアみとアリーナ、ＳＡＧＡアリーナなどが続々、オープンしている。早くアリーナを完成させたことはチームが将来構想の新Ｂ１リーグの基準を満たすだけでなく、地元のファンを増やし、安定した入場者数と興業利益を確保することにメリットとなる。スポーツはビジネスであるが、地域への貢献も大きいものだ。地域に誇れる施設、地域に誇れるチームは今後も大きな影響力を与えていくだろう。

今後もＢリーグチームの地域への貢献度についての調査を続けていくつもりだ。

写真１：オープンハウスアリーナ太田の外観（本人撮影）

写真２：オープンハウスアリーナ太田前のチーム案内板（本人撮影）

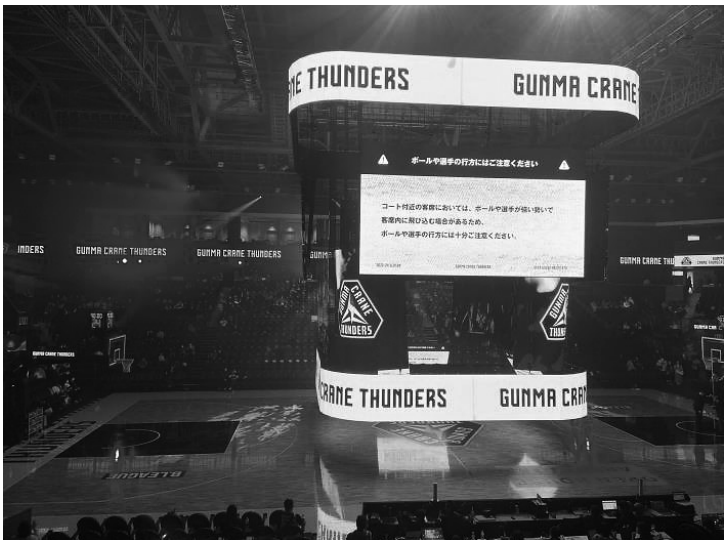

写真３：アリーナ室内　４面スクリーン（本人撮影）

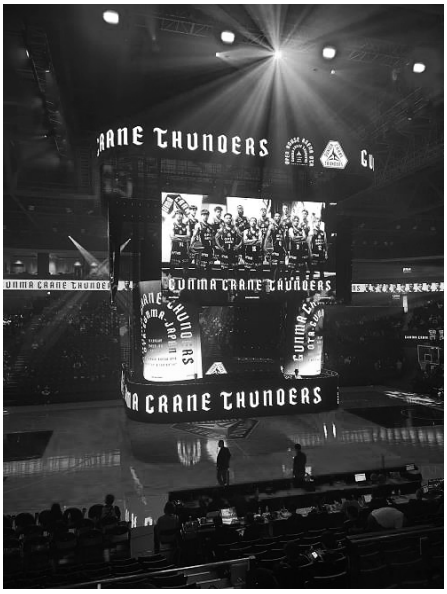

写真４：アリーナ室内４面スクリーン（本人撮影）

引用

1　B.LEAGUE　ホームページ　https://www.bleague.jp/　「B.LEAGUEとは」

2　群馬クレインサンダーズホームページ　https://g-crane-thunders.jp/「CRAINE THUNDERS ONGAESHI」

参考文献／参考サイト

地方創生応援税制（企業版ふるさと納税）について　内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局
内閣府地方創生推進事務局

群馬県庁ホームページ　https://www.pref.gunma.jp/

ザスパクサツ群馬ホームページ　https://www.thespa.co.jp/

群馬ダイヤモンドペガサスホームページ　https://d-pegasus.com/

群馬クレインサンダーズホームページ http://www.ibarakirobots.win